

8. 就学前の健常児における [suu]・[ɟu] の構音と語音弁別力の発達

上智大学言語聴覚研究センター¹⁾, 上智大学理工学部
電気・電子工学科²⁾

細川亜希子¹⁾, 進藤美津子¹⁾, 平井沢子¹⁾, 荒井隆行²⁾

【目的】機能性構音障害児は健常児と比較して語音弁別力が低いのではないだろうかという前提に立ち、健常児の [suu]・[ɟu] の構音と語音弁別力の発達を検討する。

【方法】健常幼児 94 名 (3 歳 5 ヶ月～4 歳 4 ヶ月 32 名, 4 歳 5 ヶ月～5 歳 4 ヶ月 32 名, 5 歳 5 ヶ月～6 歳 4 ヶ月 30 名) と成人 17 名を対象とした。調査は, [suu]・[ɟu] を語頭・語中・語尾に含む単語から成る構音検査と, [suu]・[ɟu] を音声刺激とする語音弁別の同定課題で構成された。[suu]・[ɟu] において, 加工されない音, 子音をホワイトノイズで置き換えられた音, 母音の一部をホワイトノイズで置き換えられた音を作成し, 音声刺激を 6 種類とした。

【結果】90%以上が構音可能となるのは, [suu] では 5 歳 5 ヶ月～6 歳 4 ヶ月, [ɟu] では 4 歳 5 ヶ月～5 歳 4 ヶ月であった。[suu]・[ɟu] の聞き分けが可能である人数の割合は, 年齢が上がるにつれて上昇した。語音弁別課題の正答数は, 年齢が上がるにつれて上昇した。また, 音声刺激の音響情報量の減少によって正答数が減少した。年齢が下がるにつれて音響情報量の減少による影響を受けやすく正答数が下がった。また, 構音が可能である参加者において聞き分けが可能である人数の割合が高かった。

【考察】[suu]・[ɟu] の語音弁別力は年齢が上がるにつれて発達することが明らかとなった。また, 語音弁別の際, 低年齢児はより多くの音響情報を必要とすると示唆される。健常児においては, 構音と語音弁別力は同時に発達すると考えられる。